

小敦盛 二段

さる程に、敦盛公は刀を抜いて、熊谷次郎直実に打ってかかるに、熊谷もしかと受け止め。受けつ流しつ、追いつ追われつ、此処を先途と火花を散らし、二騎は並んでただひたすらに切り結ぶ。(クズレ) 未だ勝負もつかぬまま、敦盛公は刀を捨てて、いざ組まんとぞ駆け寄るに、熊谷も同じく刀投げ捨てて、望むところと駆け寄って、馬上のままにむずと引き組み、互いに交わす声のうち、ともに鎧を踏み外し、両馬の間にどつと落ち、上へ下へと揉み合う内に……

痛わしや、敦盛公の心はいよよ勇めども、鬼とも紛う熊谷は、やすやすと組み伏せて、首を刎ねんとしたれども、平家の武者のか弱きことを訝しみ、兜の内を窺うに、薄化粧にてお齒黒付けた貴公子の、年の頃なら十四五計り、実に顔ばせ麗しく、痛わしくこそ思われて、少し力を緩めては語りかけるに、

「さても御身は平家方にて、何と言う公達にてや渡らせ給う。名を名乗りたまうべし。」

敦盛公は組み敷かれ、苦しい息をつきながら、

「さてもまた、武蔵の国の熊谷は、文武二道と聞いてはいたが、戦の法に適わぬ事を言うものか。我こそは天下の朝臣、殿上人の席に連なり、詩歌管弦修めたれども、此の三力年の間には一門の武運も尽きて、都より落ちゆく中で、もののふの有り様をあらかたに聞き習いしに、そもそもが、もののふの名を名乗るとは、戦場に群がり臨み、鎧甲胄身につけて、刃を抜いて、我は何処の何某と、名乗り合うては、勝負を決するものなれば、斯くの如くに組み敷かれ、其の儘に名を名乗るとは、聞いたことさえなきものか。」

(熊谷は)

「言われることはもつともなれど、名を伺って首を取り、直実が手柄

としたく思うなり。」

(敦盛さらに答えるに、)

「それなれば、心配するに及ぶまい。某の首、汝の主、義経に見せて尋ねよ。もし義経が見知らずば、義経の兄、蒲の冠者に見せて尋ねよ。蒲の冠者も見知らずば、此の度の戦にて平家方より生け捕りの者、多数あるべし。その者たちも見知らずば、ただ草叢に捨てるがよいぞ。熊谷よ。」

(答えを聞いて直実は、)

「さてもまた、もののふの道、よくわきまえておいでのことよ。実にこれ、哀しきものは我等にて候や。あるじに就いて護らんとせば、親に弓引き子とも切りあうものなれば、此の度の戦にて熊谷と出会うたことも、前世の縁と思しめし、名乗り給わば、後生をも弔い申さん。」

敦盛公は名乗るまいとは決めてたものの、後生をば弔われるを喜びて、名を明かすには、

「我を誰ぞと思うらん。我こそは葛原親王の子孫にて、平経盛が末子、無官の太夫敦盛とは某なり。歳は十六、戦はこれが最初なり。もうこれ以上、言わせるな。熊谷よ。はや首を取るがよからう。なんじにとって良き手柄なり」

熊谷は涙流して、

「敦盛公にてましますや。御歳十六、さてもまた同い年にて候や。御存じのことと思えど、我が息子、直家も此の度の戦に臨み、左の腕に矢を射られ、某しに相い向かい此の矢を抜いて給われと、頼みし折に、直実ほどのもののふが戦のさ中、我が子に感け、手当したとは末代までの名折れと思ひ、如何に直家。その傷が深手であれば、馬から降りて自害

せよ。さもなくば、敵と引き組み打ち死に致せ。篠党の名を汚すなど、きつと睨んだその時に、直家は某の顔一目見て、敵の只中斬り込みにけり。後ろ姿を見た限で、二目とは叶わぬこととなつてしもうた。直家は、東国の田舎育ちで、色も黒くて、情けの道も知らねども、我が子であれば愛おしい。御身の父御、経盛卿も、大切に育て上げたる若君を磯辺に一人残されて、さぞや嘆いておられよう。直実がおめおめ命ながらえて、武蔵の国に帰らんに、直家が死を告げたなら、母親もさぞや嘆くに相違ない。経盛卿の御心、直実が心とまさに一つにて。子故に迷う親心、今、身の上に知られたり。」

扱、熊谷は我が子直家偲びつつ、この公達を打ちとつて、直実の手柄としても何にかはせん。我が息子直家の千万年の後生の為に命助けてまいらすべしと、心に定め、

「されば若君、平家方にて言うべきことは、武蔵の国の熊谷に打たれかけたが、その息子直家に引き換えて助けられたと、経盛卿に御物語候え」と、言うが早いか敦盛公を引き起こし、鎧の塵を払いては、馬引き寄せて乗せた後、自らもまた馬に乗り、しばらくを見送るほどに、最早後ろに鬨の声。熊谷が振り向くに、右に左に源氏の軍勢、山の上には九郎判官義経公が弁慶以下の家来をともない、源氏の旗を靡かせる。源氏の武者は声々に、

「武蔵の国の熊谷は、只今敵を捉えしに、逃すはまさに逆臣とは覚えたり。一心にて有るならば、熊谷共々打ち取るべし」と、
口々に言いたてたれば、熊谷も詮方なくて、扇を挙げて敦盛公を呼びもどし、

「如何に若君、味方の軍勢御覧候え、何と少しでも助けたいとは思えども、源氏の軍勢雲霞の如し。逃るることも叶うまじ。痛わしけれど、直実が手に掛けて、後世をも祈り参らせて、回向せん」とぞ、
告げたれば、敦盛公は涙を流し、

「もののは明日なきものと思えども、此処をのがれて、行く先で仏も知らぬもののはに打たれんならば虚しかれども。此れほどに後世を知りたるもののはに打たれたならば、死する命も惜しからず。熊谷よ、今こそ首を打つべし」と西に向かいて手を合わせ、覚悟極めておわします。さしもの猛けき熊谷も、何処に刃を当てたものかと、心も乱れ気も絶えて、途方に暮れていたものの、気を取り直し、馬上のままにむずと引き組み、両馬の間に引き下ろし、敦盛公のみ印を颯とばかりに切り落とす。

さすが豪気の熊谷も、暫し遺骸に取り付いて、浜に伏してぞ泣きにける。浜に伏してぞ泣きにける。

さりながら源氏の軍勢見守る中で、漸う心を建て直し、遺骸を見るに、鎧の内の左には巻物ひとつ、さらに右には横笛と扇を一つ納めたり。熊谷は遺骸を葬り、首と横笛携えて、馬に乗り、大音挙げて、

「平家の公達、無官の太夫敦盛を、武蔵の国の住人にして、篠党の旗頭、熊谷次郎直実が打ち取ったり」と、勝鬨挙げて、陣屋を指して引き上げる。義経公の首実検のその後に熊谷は首を頂き、今と為っては太刀も要らぬと、弓矢ともども擲って、京の東、法然上人おわします新黒谷に引き籠り、鎧の袖も墨染の衣に替えて、法力房蓮生と名も改めて、三年が間は称名念仏専らに、敦盛公の後生をば弔いにける。

これもまた、最後の時に、交わしたる言葉有る故、もののはの情けもここに極まれり。

何を聞いても語りても、憂きは世の中、義理は熊谷、物の哀れを留めしは、無官の太夫敦盛公の最期にて、諸行無常のそのままに、全ての事は夢幻のごとくなり。夢幻のごとくなり。